

「うつ病」以外の精神疾患にも対応した 職場復帰マネジメント手法の確立に関する調査・研究

主任研究者 松崎一葉（茨城産業保健推進センター*、筑波大学大学院**）

共同研究者 小林敏郎* 久保田芳晴* 笹原信一郎** 吉野聡** 友常祐介**
谷口 和樹** 富田 絵梨子** 宇佐見 和哉** 梅田 忠敬** 林 美貴子**



【研究背景】

- ・ **労働者のメンタルヘルス不全の社会問題化**

年間自殺統計は9年連続で3万人 / 中高年男性が高率

労働者の6割がストレスを感じている

(厚生労働省：平成14年 労働者健康状況調査)

- ・ **心の健康問題の多様化**

うつ病、統合失調症、人格障害など

- ・ **労働衛生行政の様々な施策の実施をふまえた現状**

労働者のメンタルヘルス状況が全体として改善傾向に至らない



職場復帰が円滑に進まず休職を繰り返すケースの増加
患者本人の希望に強く依存する復帰判断



【目的】

職場復帰事例において
主治医診断書病名と休職・復職状況を分析し、
職場復帰支援のマネジメント手法を検討する



【対象と方法】

対象：心の健康問題による休業事例

方法：

主治医、労働者双方から同意を取得

休業期間・復職支援の対応困難感等について情報収集

研究チームによるレトロスペクティブな操作的診断の実施

主治医診断書病名と研究チームによる

レトロスペクティブな操作的診断結果の比較、

双方の乖離について分析



【事例1】 30歳 男性
診断書病名 **うつ病**
研究チームの見解 **うつ病**

採用12年目に入り、責任者の立場となり、プレッシャーから体調を崩すことが続いていた。自ら健康管理室を訪れ、保健師に相談。

ある年の4月



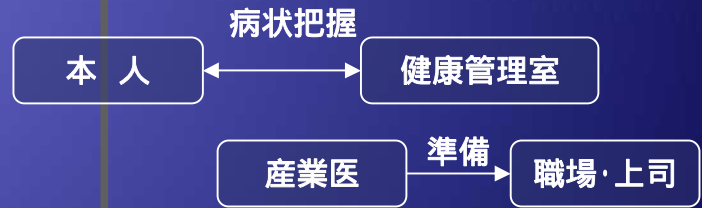
体調不良で受診した内科医の言葉がきっかけで相談
相談を受けた保健師は、産業医の病状把握が必要と判断



抑うつ気分、意欲減退、自律神経症状を認めた。
職場での責任の重さがプレッシャーとなっていると



医療機関受診、薬物療法開始と同時に4週間の自宅療養



1ヵ月後

段階的に職場復帰



1年後

完全復職



【事例2】 43歳 男性
診断書病名 心因反応
自律神経失調症

研究チームの見解 うつ病

採用13年目メールで「しばらく休み
 ます」とだけあって以来、出勤しな
 くなった。6年前に精神科通院歴あり。
 1年前に失恋した。上司から医務室
 に相談された。(当時39歳)

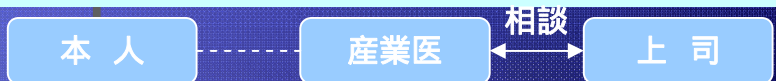
ある年の4月



引きこもりのような状態を心配した上司が相談。



入院を勧めたが、本人は拒否。内部診療所での治療を開始。
 しばしば、相談の予約日に来室しないことがあった。



相談室にも来室せず、生活リズムも乱れて欠勤することも
 多い旨の連絡があり、上司と相談しながら休職も含めて今後
 の方針を検討。

3年後



上司と面談とメールを併用しながら連携し、本人に対して心理
 的に介入。

家族にも相談に加わってもらい、病休として、入院治療する
 こととなった。



4年後

段階的に職場復帰。

4年8ヶ月目現在、生活リズムが乱れることもありながら、
 仕事をこなしている状態。



【事例3】 32歳 男性

診断書病名 精神衰弱

分裂病

統合失調症

研究チームの見解

統合失調症

採用5年目頃より微熱、頭痛を訴え始めた。仕事でストレスがかかると月1,2回休むようになった。約1年後休みがちであることを心配した上司が病院を受診するよう勧めた。(当時23歳)

ある年の12月



欠勤が多いことを心配した上司が病院を受診するよう指示。



症状改善せず。



2～3年後

本人、上司、家族とも面談をしていたが、2年9月ヵ月目より、2ヵ月間休職した後、復職したが、その1年後より休みがちになった。



本人、父親、上司が外部主治医と相談し、3ヵ月休職することとなった。

4年後

段階的に職場復帰。

5年後

ほとんど出勤しなくなり、病院を受診した際に入院となった。



6～8年後

退院後、段階的に職場復帰。その後も、6年4ヵ月目から3ヵ月、7年3ヶ月目から1ヵ月入院し、復職と入院を繰り返す。

7年6ヶ月目より段階的に復職し、8年4ヶ月目には標準勤務も可能となった。



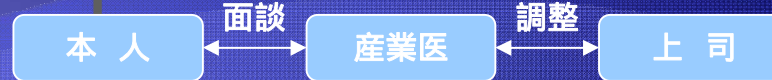
【事例4】 35歳 男性
診断書病名 心因反応
うつ状態
研究チームの見解
強迫性障害、人格障害

高校時代より、火の始末、戸締りなどの確認する癖があった。危険物を取り扱う職場へ異動となり、強迫症状が悪化したため配置転換。4月下旬には外部主治医を受診していた。配置転換後、人間関係をきっかけに抑うつ状態になり、休職前に医務へ相談しに行くよう上司が指示。2ヵ月後より休職することとなった。(当時28歳)

受診の2ヵ月後



休職を前に相談しに行くよう上司が指示。



休職中も定期的に外部主治医を定期的に受診。面談を行い、並行して職場の調整も実施。

6ヵ月後

段階的に職場復帰。
200X年4月には通常勤務も可能となった。



再度、調子を悪くしたため、4年12ヶ月目より再度休職。

4年13ヵ月後

段階的に職場復帰。

6年10ヵ月後

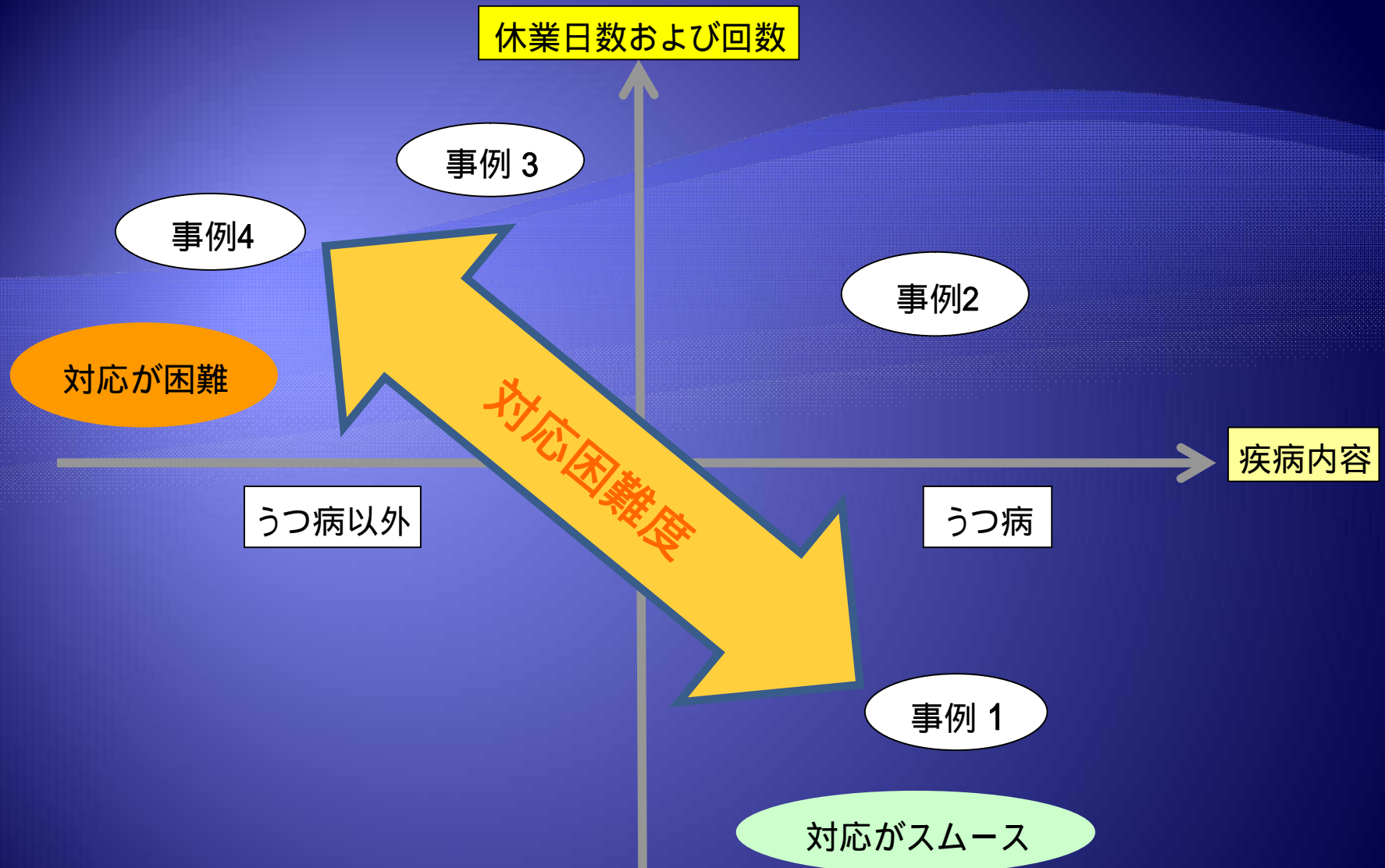
6年10ヶ月目現在、仕事をこなしている状態。



【結果】事例の概要

	年齢	休業回数	平均休業日数	対応困難感	主治医診断書病名	操作的診断結果
事例1	30	1	26	易	うつ病	うつ病
事例2	43	3	45	普通	心因反応2回 自律神経失調症1回	うつ病
事例3	32	5	42	困難	精神衰弱1回 分裂病2回 統合失調症2回	統合失調症
事例4	35	3	58	困難	心因反応1回 うつ状態1回	強迫性障害1回 人格障害2回





各事例の疾病内容と休業日数および回数による対応困難度の分類



【考察とまとめ】

・ 対応困難度と事例の特徴

対応困難度が高いほど・・・

休業回数および日数が多い

主治医診断と精神科医研究チームによる

レトロスペクティブ診断の乖離が大きい

・ 休職期間の長期化や再休職防止のために重要なこと

うつ病

適切な診断名に基づく職場対応が行われることが、休職期間の短縮や再休職を防ぐために重要と考えられた

以外の疾患

障害として職務遂行能力に影響を及ぼすことが多く、休職期間の長期化や休職を繰り返しやすく、復帰にあたり工夫が必要と考えられた



事例背景

- ◆ 日頃の精神科医・産業医活動で様々な職場不適応事例に対応
- ◆ 従来は、「メランコリー親和型うつ病」が中心
- ◆ 最近では、「未熟型うつ病」、「ディスチミア親和型うつ病」、「外罰型うつ病」や「現代型うつ病」などに分類され始めているタイプが増加している臨床経験的印象



共通するのは、精神的発達課題における
問題の可能性



経験事例一覧

- 1 . 仕事を軽減してもらっても、職場に対する不平・不満しか出てこない研究職
- 2 . 一日6時間しか自分は働けないと主張する新入社員
- 3 . 求人募集にすら応募資格がない長期休職者



事例1 仕事を軽減してもらっても、職場に対する不平・不満しか出てこない研究職

30歳女性。仕事と家庭のストレスイベントの重なりを契機にうつ病発症。はじめは厳しい対応をした上司も、本人のただならぬ他罰性に、裁量労働だからと半日だけ職場で仕事をして家に帰り、成果も上がらぬ本人に手をあげている。両親もどちらも研究職で、幼少期から父親も母親も常に論理的に本人のだめなところを指摘し、本人が行動を改めるまで執念のように理屈で攻めたてたという。



事例2 一日6時間しか自分は働けないと主張する新入社員

23歳女性。大学卒業後、母親の強い勧めで某銀行に入社。新人研修中に、泊まり込みの研修は体力に自信がないから無理ですと拒否。6ヶ月に渡る研修期間を経て、支店に配属。あまりにミスが多く、見かねた上司が強い指導を行ったことを契機にうつ病発症し休職。手続きを母親が会社に来て行う。はじめは上司への恨み・つらみが前面に立っていたが、休職期限満了に伴い復職したいと主張。6ヶ月の休職後に段階的職場復帰していく途中で、「私は体力がないので6時間勤務が限界です」と話される、、、



事例 3 求人募集にすら応募資格がない 長期休職者

42歳男性。職場の飲み会の途中で周囲に何も言わずに一人抜けてどこかで遊んでいるような人柄。上司の理不尽な指導を契機にうつ病発症し休職。症状は軽快せず休職は延長されつづけ、3年の期限満了を直前にして、復職可能との診断書が突然出てくる。本人と面談すると、「休んでいる間に転職も考え、求人募集など探したが、自分の年齢ではガソリンスタンドの店員ですら無理と分かり、復職したい」と、、、休職中は、子供を自分の両親に預け日中電気屋巡りなどをしていたという。



まとめ

- ◆ うつ病以外の疾患 障害として職務遂行能力に影響を及ぼすことが多く、休職期間の長期化や休職を繰り返しやすい、復帰にあたり工夫が必要と考えられた。
- ◆ 一方で従来型うつ病と異なるうつ病も増えてきており、こちらに対する対応も今後の重要な検討課題と考えられた

